

米軍「統合ドクトリン」で勝利する

『作戦司令部の意思決定』を読んで

著者 堂下哲郎（元海将）

安全保障委員会事務局長

中川 義章 陸自78

読者諸兄は、「あれ、海上自衛官の本の紹介、珍しいなア」と思われるでしょう。本の正体を示すキーワードは、「米軍」「統合」「ドクトリン」で、海軍の話ではありません。著者は十数年前、統合幕僚監部報道官時代の同僚で「情報漏洩」を疑われると口をつぐむ上司・同僚が多いなか、米国関係の「小話・小ネタ」を提供してくれた有り難い米国通です。昨年3月には、偕行社安全保障シンポジウムの講師パネラーとして、参加してもらいました。

その米国専門家が上梓した新刊を手に取り、一読して、「書名は、『戦う組織の意思決定』が良いし、経歴は元海将でなくて、元米国中央軍司令部先任連絡将校の方がよかつた」と電話した。読者諸兄にも、陸上自衛隊生活を振り

返り、てんやわんやの米軍共同の日々を思い出させ、米軍の最前線を知るうえで、大変おもしろく示唆に満ちた内容です。

本書は、『野外幕僚勤務』の米軍の最新版JOPP (Joint Operation Planning Process) の紹介と解説を軸とし、様々な摩擦、障害、事件、事故を越え、不確定な未来に何かを遂行しようと活動する組織、短く言えば「戦う組織」の意思決定に関する米軍の最新手法を、見事に描き出しています。

自衛官経験のない一般読者にとって、軍事的現象の説明が短いのと、軍事英語の略語が多いことから、やや難解かも知れませんが、意思決定の手順の説明と割り切つて読んでもらえれば理解できるでしょう。元陸上自衛官にとつても、略語の連続に閉口するでしょうが、『野外幕僚勤務』（自衛隊草創期の1950年代の米陸軍の最新的手法であったMDMP (Military Decision Making Process) を翻訳して導入したもの）の最新版であり、同じ米国製の手法で骨格は維持されているので、読みやすいと思います。略語は「エイ」と読み飛ばしても、結論はぶれないので問題は起きません。

説明の材料として、主にイラク戦争とフォークランド戦争を取り上げ、それ以外に日露戦争・太平洋戦争時の日

本軍と米軍、ベトナム戦争時の米軍、今回の米軍の北朝鮮の核ミサイル危機対応などを用いているので、非常に分かりやすい。

また、米国の現在の動きをどのように解釈するかという面では、軍事作戦がどのような考え方や手順で計画実行されるのかが分かるので、軍事情勢の見方が一段と深くなることは確かです。

さらに、JOPPの前提となる米軍の軍事思想の基本、すなわち統合ドクトリンについて、自衛官にはあまりなじみのない作戦術 (Operational Art) 概念があることを教えています。統合ドクトリンは、国家のために平時有事を問わず軍事力をどのように運用するかを計画するもので、JOPPという計画作成マニュアルに具体化しているのです。ドクトリンが、有事の「戦い方」「戦法」のような狭いものでなく、戦闘力の全てを組織化して平時有事を問わず行使するという「計画作成マニュアル」に具体化されるのは、絶対的に優越する戦闘力を持つ国として当然ですが、ある意味で「目からうろこ」かも知れません。

そんなことを考えられない我々は、「勝ち目、戦機」をつかむべく、状況に応じ、特に指揮官ニーズに応じ、融通無碍に「野外幕僚勤務」を応用し幕

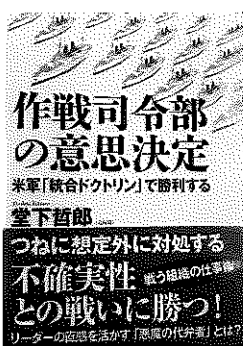
僚活動を行っていました。

一方米軍は、実戦経験を用いて標準化したプロセスを目指し、マニュアル化を進め、開発・改善を行い、運用しています。この両者が、日米共同作戦を計画すると、それだけで様々な摩擦が生じるのは当然かも知れません。小生は、指揮官ニーズに準ずるものとして米軍ニーズを尊重し、摩擦を最小にして強力な米軍火力を借用しつつ、隷下部隊への米軍の影響を遮断することを、幕僚長業務としていました。

特に、イラク戦争当時は、米軍もプロセスの開発中で変化が激しく、ALB (Air Land Battle) だ、EBO (Effect Based Operation) だと、振り回されました。本当にてんやわんやの日米共同演習の思い出になります。

当時は、米軍人に指揮幕僚活動に就いてのブリーフィングを依頼しても、理解したうえで説明してないことが見え見えで、全体像がつかめないままでした。本書のようなトータルな説明があれば、日米共同もより実りあるものになっただろうと思います。

現役自衛官が読んで、日米共同演習に参加すると大いに役に立つだろうというの、老兵の余計な老婆心かも知れません。



出版 並木書房